

VIII 研究活動

蜂屋教授	中国哲学	南朝の思想
岡本教授	中国哲学	清代の思想と文学
丘山助教授	中国哲学	『高僧伝』講読
上村教授	印度哲学 印度文学	サンスクリット文学講読
		インド文学研究の諸問題
丘山助教授	印度哲学 印度文学	漢訳仏典の研究
後藤教授	宗教学 宗教史学 (イスラム学)	ムハンマド伝研究
鎌田助教授	宗教学 宗教史学 (イスラム学)	イスラム思想文献研究
戸田教授	美術史学	東洋美術史演習
小川助教授	美術史学	中国絵画史研究
		東洋美術史演習

(2) 法学政治学研究科

猪口教授	政治学	国家と社会
鈴木教授	政治学	中東伝統国際秩序観研究

(3) 経済学研究科

柳澤教授	応用経済学	アジア経済論 (応用経済学VII)
		応用経済学専攻指導
加納教授	理論経済学 経済史学	経済史専攻指導

(4) 総合文化研究科

後藤教授	地域文化研究	アジアの思想・宗教
		地域文化研究特別研究
羽田助教授	地域文化研究	アジア地域文化相関論演習
		地域文化研究特別演習
松谷教授	文化人類学	文化過程論演習II
		文化人類学特殊研究III
		文化人類学特別研究
末成教授	文化人類学	文化人類学特別演習
		文化理論演習II

関本教授 文化人類学

社会人類学特殊研究III

文化人類学特別研究

文化人類学特別演習

文化理論II

社会人類学特殊研究IV

文化人類学特別研究

文化人類学特別演習

加納教授 文化人類学

社会人類学特殊研究II

原教授 国際関係論

国際経済関係論

国際経済関係論

国際経済関係論演習

国際経済関係論特殊研究

国際関係論特別研究

国際関係論特別演習

岡本教授 比較文学比較文化

比較文明論演習

(5) 農学系研究科

山田教授 農業経済学

国際農業論特論I・II

国際農業論演習I・II

原教授 農業経済学

国際農業論特論I・II

国際農業論演習I・II

2. 学部

(氏名)

(学科)

(講義題目)

(1) 文学部

戸田教授 美術史学

美術史学特殊講義

鎌田助教授 イスラム学

イスラム史概説

(2) 法学部

鈴木教授 特別講義

中東の政治

(3) 経済学部

VIII 研究活動

柳澤教授

インド経済史

(4) 教養学部

松谷教授 教養学科

先史人類学

文化人類学演習

原教授 教養学科

東南アジアの経済

末成教授 教養学科

地域民族誌II

柳澤教授 教養学科

南アジア近代史

後藤教授 教養学科

地域研究論III

鎌田助教授 教養学科

イスラム思潮

加納教授 教養学科

東南アジア近代史

関本教授 教養学科

社会の構造

文化人類学理論II

鈴木教授 教養学科

アジアの政治変動

田中助教授 一般教養

国際関係論

国際体系I・II

猪口教授 一般教養

政治学(文科I類)

(5) 農学部

山田教授 農業経済学

国際農業論

原教授 農業経済学

比較農業

(6) 全学一般教育ゼミナール

末成教授 第1・3学期

人類学から見る中国社会

丸尾教授 第2・4学期

魯迅《門外文談》を読む

I 刊行物一覧

1. 東洋文化研究所紀要

第113冊 (1991年1月)

『原始涅槃経』の存在

——『大乘涅槃経』の成立史的研究 その1 ——

下田 正弘

初期中国仏教の伝をめぐる諸問題

——『修行本起経』に関連して——

河野 訓

「信仰」の誕生

——インドネシアに於けるマイナー宗教の闘争——

福嶋 真人

ĀNANDA VARDHANA 作

DHVANYĀLOKA 訳注 (第3章—1)

上村 勝彦

第114冊 (1991年2月)

魯迅の祖父周福清攷(一)

——その家系、生涯及び人物像について——

松岡 俊裕

正祠と淫祠

——福建の地方志における記述と論理——

小島 毅

タブリーズの絨毯貿易

坂本 勉

タミル古代の文人たちのサンガ

——伝 Nakkirar の注釈をめぐって——

高橋 孝信

陳昌標の学生生活

——一九二二年の日記『我喜歡這樣』をめぐって——

坂井 洋史

中古漢語における重紐韻介音の音価について

平山 久雄

第115冊 (1991年3月)

VIII 研究活動

乾隆禁書(一)

—— 著者たちのプロフィール ——

岡本 さえ

宋詩より見た宋代の茶文化

高橋 忠彦

魯迅の祖父周福清(二)

—— その家系、生涯及び人物像について ——

松岡 俊裕

光復会前期の活動について

—— 光復会論の(二) ——

大里 浩秋

タミル最古の文典の基礎研究(1)

—— *Tolkāppiyam* 諸本の詩節の対応 ——

高橋 孝信

南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(2)

—— ヴァーストゥプルシャマンガラと寺院の平面設計 ——

小倉 泰

板垣雄三教授略歴・主要著作目録

斯波義信教授略歴・主要著作目録

第116冊 (1992年3月) 創立50周年記念論集 I

功德儀礼の二つの型

—— 台湾の事例を中心に ——

未成 道男

移民と商業ネットワーク

—— 潮州グループのタイ移民と本国送金 ——

濱下 武志

天安門事件以後のアメリカの対中政策

田中 明彦

東南アジア比較経済論の構図

原 洋之介

ヤマニ村再訪

—— 変容した農村社会、あるいは労働力市場形成 ——

友杉 孝

ジャワ人のヒエラルキーと自由

—— 村人の集いの二つの形 ——

関本 照夫

説明の様式について

—— あるいは民俗モデルの解体学 ——

福嶋 真人

アジア諸国における米価変動の比較分析：

一九五〇年～一九八六年	山田 三郎
韓国農業の成長過程と技術変化	
—— その経験と国際的意味 ——	劉 永鳳
朝鮮における水利組合事業の新たな展開	
(一九三七年～一九四五年八・一五)	宮嶋 博史
冷戦後世界秩序と日本対外政策	猪口 孝

第117冊 (1992年3月) 創立50周年記念論集II

西周時代の重量単位	松丸 道雄
中國古代の租佃契	池田 温
唐五代杖殺考	川村 康
薛稷六鶴図屏風考	
—— 正倉院南倉宝物漆櫃に描かれた草木鶴図について ——	小川 裕充
牧谿における宋と元	
—— 老子図をめぐる ——	戸田 禎佑
梁楷研究序説	
—— 「李白吟行図」から『図絵宝鑑』の梁楷伝記まで ——	林 秀薇
劉長生の生涯と教説	蜂屋 邦夫
閩北の普度と目連戯	
—— 中国初期演劇史初探 ——	田仲 一成
嘉靖の礼制改革について	小島 毅
中国人の比較思想	
—— 《口鐸日抄》の対話から ——	岡本 さえ
頽れいく「進化論」	
—— 魯迅「死火」と「頽れおちる線の顫え」 ——	丸尾 常喜
「閉じられた自己」から「開かれゆく自己」へ	
—— 仏教における自己と他者 ——	丘山 新

VIII 研究活動

第118冊 (1992年3月) 創立50周年記念論集III

- 『バガヴァッド・ギーター』のヨーガ 上村 勝彦
植民地期南インド手織業の変容と消費構造 柳沢 悠
アッラーマ・ヒッリーのイマーム論
——『意図の解明・教義学綱要注釈』第五章訳注—— 鎌田 繁
後期オスマン帝国における没落観と改革論 鈴木 董
一六世紀イスタンプルの住宅ワクフ 林 佳世子
一六七六年のイスファハーン
——都市景観復元の試み—— 羽田 正
ムハンマド伝の史料に関する覚書
——伝承(ハディース)について—— 後藤 明
ラメ・ザミーン遺跡出土の加工痕のある三点の骨について 松谷 敏雄
タミル・ナードゥにおける王権と寺院
——王の神格化をめぐる—— 小倉 泰
グリフヤスートラ文献にみられる儀礼変容 永ノ尾信悟
「地代」制度導入期ジャワ農村の「耕作者」像
——マラン県『詳細査定簿』の分析—— 加納 啓良
池田 温教授略歴・主要著作目録
山田三郎教授略歴・主要著作目録

2. 東洋文化

第71号 (1990年12月) 特集“中国戯曲小説研究”

- 中国初期演劇史論——仮面劇よりの展望—— 田仲 一成
江西青陽腔目連戯と宗教儀式活動 劉 春江 著/田仲一成 訳
明代伝奇の文学
——湯頭祖の戯曲における心理表現を中心として—— 廣瀬 玲子
中国地方劇脚本の流伝と展開

—— 椰子・皮黄劇「鋤美案」を題材として ——	加藤 徹
馮夢龍「叙山歌」考	
—— 詩経学と民間歌謡 ——	大木 康
『三国演義』 版本試論	
—— 通俗小説の流伝に関する一考察 ——	上田 望
「義賊」の誕生	
—— 雑劇『水滸』から小説『水滸』へ ——	笠井 直美
変身譚の変容	
—— 六朝志怪から『聊齋志異』まで ——	戸倉 英美

第72号 (1992年3月) 特集 “都市からみたアジア”

唐長安城の儀礼空間	
—— 皇帝儀礼の舞台を中心に ——	妹尾 達彦
『儒林外史』における都市知識人の生活と出版	大木 康
植民都市マニラの形成と発展	
—— イントラムロス (城壁都市) の建設を中心に ——	清水 展
東南アジア群島部における港市国家の形成	
—— 16世紀末のバントゥンを例として ——	生田 滋
バンコク物語抄	
—— 道に残された記憶を求めて ——	友杉 孝
中世都市ヴィジャヤナガル	
—— ヒンドゥー王都のレイアウトとその解釈 ——	小倉 泰
イラン人のメッカ巡礼と都市ネットワーク	坂本 勉
チューリップ時代のイスタンブルにおける詩人と泉	
—— 18世紀初頭オスマン朝の都市文化の一側面 ——	鈴木 董

3. 東洋文化研究所研究報告 (* 在庫なし)

- * 1. 仁井田 陞『中国の農村家族』1952
- * 2. 周藤 吉之『中国土地制度史研究』1954
- * 3. 泉 靖一・斎藤廣志『アマゾン その風土と日本人』1954
- * 4. 大林 太良『東南アジア大陸諸民族の親族組織』1955
- * 5. 結城 令聞『世親唯識の研究 上』1956
- * 6. 関野 雄『中国考古学研究』1956
- * 7. 窪 徳忠『庚申信仰』1956
- * 8. 江上波夫他『館址 東北地方における集落址の研究』1958
- * 9. 仁井田 陞『中国法制史研究 刑法』1959
- * 10. 仁井田 陞『中国法制史研究 土地法・取引法』1960
- * 11. 米澤 嘉圃『中国絵画史研究』1961
- * 12. 結城 令聞『唯識学典籍志』1962
- * 13. 仁井田 陞『中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』1962
14. 築島 謙三『文化心理学基礎論』1962
- * 15. 窪 徳忠『庚申信仰の研究 年譜篇』1962
- * 16. 仁井田 陞『中国法制史研究 法と慣習・法と道德』1964
- * 17. 鎌田 茂雄『中国華嚴思想史の研究』1965
- * 18. 江上 波夫『アジア文化研究 要説篇』1965
19. 泉 靖一『濟州島』1966
20. 江上 波夫『アジア文化史研究 論考篇』1967
- * 21. 鈴木 敬『明代絵画史研究 浙派』1968
- * 22. 窪 徳忠『庚申信仰の研究 島嶼篇』1969
- * 23. 中根 千枝『家族の構造 社会人類学的分析』1970
- * 24. 窪 徳忠『沖縄の習俗と信仰』1971
- * 25. 川野 重任『農業発展の基礎条件』1972
- * 26. Nakamura Kojiro, *Ghazali on Prayer*, 1973

- *27. 窪 徳忠 『増訂 沖縄の習俗と信仰』 1974
- *28. 鎌田 茂雄 『宗密教学の思想史的研究』 1975
- 29. 松井 透 『北インド農産物価格の史的研究 1861～1921年』 1977
- *30. 荒 松雄 『インド史におけるイスラム聖廟 宗教権威と支配権力』
1977
- *31. 池田 温 『中国古代籍帳研究 概観・録文』 1979
- *32. 田仲 一成 『中国祭祀演劇研究』 1981
- 33. 松丸 道雄 『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』 1983
- *34. 田仲 一成 『中国の宗族と演劇 華南宗族社会における祭祀組織・儀
礼及び演劇の相関構造』 1985
- *35. 鎌田 茂雄 『中国の仏教儀礼』 1986
- *36. 松井 透 『イギリス支配とインド社会 19世紀前半北インド史の一
研究』 1987
- *37. 鎌田 茂雄 『新羅仏教史序説』 1988
- *38. 斯波 義信 『宋代江南経済史の研究』 1988
- *39. 田仲 一成 『中国郷村祭祀研究 地方劇の環境』 1989
- *40. 濱下 武志 『中国近代経済史研究 清末海関財政と開港場市場圏』
1989
- 41. 上村 勝彦 『インド古典演劇論における美的経験 Abhinavagupta
の rasa 論』 1990
- 42. 宮嶋 博史 『朝鮮土地調査事業史の研究』 1991
- 43. 柳澤 悠 『南インド社会経済史研究 下層民の自立化と農村社会の
変容』 1991
- 44. Matsutani Toshio ed., *Tell Kashkashok The Excavations at Tell*
No. II, 1991
- 45. 山田 三郎 『アジア農業発展の比較研究』 1992
- 46. 蜂屋 邦夫 『金代道教の研究 王重陽と馬丹陽』 1992

4. 東洋文化研究所叢刊 (*在庫なし)

- * 1. 鎌田 茂雄 『華嚴学研究資料集成』 1983
- 2. 深井 晋司 編 『ターク・イ・ブスターンIII 実測図集成』 1983
- * 3. 鎌田 茂雄 『禅典籍内華嚴資料集成』 1984
- 4. Nakane Chie ed., *Social Science and Asia*, 1984
- * 5. 蜂屋 邦夫 編 『儀禮士冠疏』 1984
- * 6. 鎌田 茂雄 『道蔵内仏教思想資料集成』 1986
- 7. 山田 三郎 編 『中部タイ稲作農村の経済変容』 1986
- * 8. 蜂屋 邦夫 編 『儀禮士昏疏』 1986
- * 9. Seki Hiroharu, *The Asia-Pacific in the Global Transformation*, 1987
- * 10. 蜂屋 邦夫 編 『中国道教の現状 道士・道協・道観』 1990
- * 11. 池田 温 『中国古代寫本識語集録』 1990
- * 12. Tomosugi Takashi, *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia*, 1991

5. イラク・イラン遺跡調査団報告

- 『テル・サラサート I』*1958, 『同II』*1970, 『同III』 1975, 『同IV』 1981
- 『マルヴ・ダシュト I』*1962, 『同II』*1962, 『同III』 1973
- 『ファハリアン I』*1963
- 『西アジアの人類学的研究 I』*1963, 『同II』*1968
- 『デーラマン I』*1965, 『同II』*1966, 『同III』*1968, 『同IV』 1971
- 『ターク・イ・ブスターン I』*1969, 『同II』*1972, 『同III』 1983, 『同IV』 1984
- 『ハリメジャン I』 1980, 『同II』 1982

6. インド史蹟調査団報告

『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』第I巻 遺跡総目録
*1967, 第II巻 墓建築 *1969, 第III巻 水利施設 *1970

7. 東アジア部門美術研究分野報告

『中国絵画総合図録』第一巻 アメリカ・カナダ篇 *1982, 第二巻 東南アジア・ヨーロッパ篇 *1982, 第三巻 日本篇I 博物館 *1983, 第四巻 日本篇II 寺院・個人 *1983, 第五巻 総索引 *1983

8. 蔵書目録

『東洋文化研究所漢籍分類目録』*1973

『東洋文化研究所漢籍分類目録 書名人名索引』*1975

J 執筆論文・出版物総数・受賞

〔1990～91年度〕

著書 56冊, 論文 295本, その他 173点。

アジア太平洋賞大賞 濱下 武志 1991年

鈴木学術財団特別賞 上村 勝彦 1991年

文化勲章	江上 波夫	1991年
文化功勞者	辻 直四郎 (併)	1978年
	江上 波夫	1983年
	山本 達郎 (併)	1986年
学士院賞	仁井田 陸	1934年
	宇野 圓空	1942年
	山本 達郎 (併)	1952年
	周藤 吉之	1956年
	福島 正夫	1963年
	鎌田 茂雄	1976年
	荒 松雄	1978年
	池田 温	1983年
	鈴木 敬	1985年

IX 所員の活動

汎アジア部門

山田 三郎 やまだ さぶろう (1992. 3 停年退職)

1. 主要略歴

1931. 4 生, 1957 東大・農・農経卒, 1959 東大大学院社会科学・農経・修士課程修了, 1962 同博士課程修了, 農学博士 (東大), 同年 東大農学部助手, 1968 東文研専任講師, 1971 同助教授, 1976 同教授, 1992 停年退職。

2. 研究活動の概要・研究経過

- (1) 汎アジア経済・統計部門としての主要研究課題はアジア諸国経済発展の比較研究であるが、とりわけ、多くのアジアの国にとって依然として極めて重要な意義をもっている農業発展に焦点を当てた比較研究が中心課題である。入所以来退官に至るまで、東アジアから西アジアに至る約20カ国のアジア諸国を中心に、アジアとの対比のためのアフリカ・ラテンアメリカの途上国や欧米先進国も含めて各国農業の現地調査やFAO統計を活用した比較分析を実施してきた。1992年2月に刊行した東文研報告『アジア農業発展の比較研究』は、同年3月の退官にあたってこれまでの成果をふまえて進めてきた研究の成果である。
- (2) 上記のアジア農業発展分析を実施するにあたって、比較分析の基準としたのは、アジアで最も早く経済や農業の発展を実現した日本の経験

IX 所員の活動

である。その意味で、日本の農業発展の分析は欠かすことの出来ない課題で、それを国際視野から行ったのが、*Japanese Agriculture: A Comparative Economic Analysis*, 1990 であり、歴史的に分析したのが、*Agricultural Development of Japan: A Century Perspective*, 1991 である。

- (3) 食料経済の分析は農業問題の核心であり、いくつかの関連論文と著書を著した(7.参照)。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院農学系研究科農業経済学専攻 国際農業論特論 1990, 91年度, 東京大学農学部農業経済学科 国際農業論 1990, 91年度, 学習院大学経済学部 食料経済論 1990, 91年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

アジア政経学会 (1991年9月まで常務理事・10月以降監事), 日本農業経済学会 (1990年度理事・1991年度副会長), 国際農業経済学会日本支部 (代表), International Association of Agricultural Economists (1991年8月以降 Executive Committee Member), Asian Productivity Organization (Advisor), アジア経済研究所英文雑誌 *Developing Economies* 編集委員。

6. 過去の主要業績 (1990. 3まで)

『農林業—長期経済統計9』(梅村又次他3名) 東洋経済新報社 1966年, 「アジア農業の生産性と生産構造—マクロ計量的国際比較」『東文研紀要』63 1973年, *A Comparative Analysis of Asian Agricultural Productiv-*

ities and Growth Patterns, Asian Productivity Organization, Tokyo 1975, 「経済発展における普遍性と地域特性—アジア諸国経済発展の比較, 1960~1978」『東文研紀要』87 1981年, 『中部タイ稲作農村の経済変容』(原・加納・田中・福井) 東文研叢刊 1986年。

7. 過去2年間(1990.4~92.3)の研究業績

Japanese Agriculture: A Comparative Economic Analysis (C.L.J. van der Meer) Routledge, London & New York 1990, 『改訂食料経済』(慶野, 頼) 建帛社 1991年, 『アジア農業発展の比較研究』東文研報告 1992年, *Agricultural Development of Japan: A Century Perspective* (Y. Hayami) University of Tokyo Press 1991, 「資源効率と環境—人的資源と制度」『開発学研究』1-1 1990年, 「米の生産と流通」『食生活総合研究会』1-2 1991年, 「アジア諸国における米価変動の比較分析: 1950~86年」『東文研紀要』116 1992年, 「食生活の環境(国際環境と経済社会要素)」『食生活論』建帛社 1992年。

原 洋之介 はら ようのすけ

1. 主要略歴

1944.2生, 1967 東大・農・農経卒, 1969 東大大学院農学・農経・修士課程修了, 1972 同博士課程退学, 同年 東文研助手, 1975 国際連合アジア太平洋経済社会委員会(バンコク)派遣, 1976 農学博士(東大), 1977 帰国, 1978 東文研助手退職, 同年 東大農学部非常勤講師, 国際開発センターにて研究調査に従事, 1979 東文研助教授, 1988 東文研教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

今日まで, 市場メカニズムを読み解く理論経済学の展開を明示的に考慮

IX 所員の活動

しつアアジア諸国での現地調査を極力多くおこなうことをふまえて、アジア諸国の経済発展の内的メカニズムの解明を続けている。助手時代から最近まで、東南アジア地域を主たる研究対象としてとりあげ、この地域内に高度経済成長を実現しえている地域とその反対に経済停滞にみまわれている地域という二極分化傾向が発生している事態に注目して、経済成長の必要条件と充分条件との解明に勢力をそそいできた。その現在までの結論は、ほぼ以下の通りである。例えば、1960年代以降のタイとビルマとの対称的経験が明らかにしてくれているように、国内民間経済主体に経済活動の自由を保障するような経済政策の採用が経済成長の必要条件といえることは間違いない。この点は、開発経済学の最近の主流派が強調している事態でもある。しかし、例えば現在までのタイとフィリピンとの間にみられる長期的成長パフォーマンスの差異は、市場メカニズムによる経済成長が持続していくためには、国内社会構造がその社会内の大半の人間に市場経済競争への参入に関して機会の平等を保障しうるようなものでなければならぬという重要な事態を明らかにしてくれている。この点は、どうした訳か、開発経済学の主流派によってほぼ無視をされているのである。東南アジア地域の戦後史は、経済成長には市場経済システムが必要不可欠であるが、ある国・地域が若し市場経済の効率化に適した社会構造をもっていない時にはその国・地域の経済成長は大きな壁につきあたってしまう可能性が強いという大層興味深い事実を我々に語ってくれているのである。

最近になって、以上のような東南アジア地域の経済観察をふまえて確立しえた視点をふまえて、特に市場経済化とそれぞれの地域・国の社会構造の適合性という視点の下で、研究対象地域を東南アジア以外にもひろげて、東・南・西アジア諸国の経済の観察を開始している。近い将来に、理論経済学が集中的にその機能を分析している市場経済システムと地域研究が焦点をあてているアジア各地域の個性ある社会構造との連結ないし適合という視点から、本格的な汎アジア比較経済論を構築したいと考えているところである。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院農学系研究科農業経済学専攻 国際農業論特論 1990, 91年度, 東京大学大学院総合文化研究科国際関係論専攻 国際経済関係論 1990, 91年度, 東京大学農学部農業経済学科 比較農業 1990(冬), 91(冬)年度, 東京大学教養学部教養学科 東南アジアの経済 1990(冬), 91(冬)年度, 千葉大学園芸学部 農業問題特論 1991(冬)年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

日本農業経済学会, アジア政経学会, アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞選考委員, 国際開発センター研究顧問。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

『クリフォード・ギアツの経済学』リプロポート 1985年, 『東南アジアからの知的冒険』(共著)リプロポート 1986年, 『中部タイ稲作農村の経済変容』(共著)東文研叢刊 1986年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

『アジア経済論の構図：新古典派開発経済学をこえて』リプロポート 1992年5月, 『フィリピン農地改革の研究』(編著)日本学術振興会国際共同研究報告書 1992年4月, “Options for Development Strategy” A. Murakami et al. eds., *Vietnam, Laos and Cambodia in Transition: Reconstruction and Economic Development*, The Sasakawa Peace Foundation 1992, 「利子のない銀行」『都市文明イスラームの世界』クバプロ 1991年9月, 「近現代史からの日本型市場経済の構図」『経済研究』42-2 1991年4月, 「東南アジア比較経済論の構図」『東文研紀要』116

IX 所員の活動

1992年3月、「アジア地域の発展と環境保護」『電機ジャーナル』1991年8月。

劉 永鳳 ゆう よんぼん (1991. 4 採用, 1992. 2 退職)

1. 主要略歴

1963. 2 生, 1984 大韓民国国立忠南大・農・農経卒, 同年 東大大学院農学系・外国人研究生, 1985 同農経・修士課程入学, 1987 同修了, 同年 同博士課程入学, 1991 同退学, 同年 東文研助手, 同年 農学博士 (東大), 1992 東文研助手退職, 同年 韓国国立済州大学専任講師。

2. 研究活動の概要・研究経過

研究の基本テーマは経済発展との関連からみた開発途上国の農業開発問題である。特に、アジア地域における農業開発を同地域の先進工業国の農業成長過程を分析することによって検討することを主な研究課題とする。

今までの研究は、主に韓国農業の成長過程に対する分析である。戦後極めて貧弱であった韓国経済が急速な成長を果たしている中、農業部門は如何に変化してきたのかを究明しようとしている。特に、国際比較の視野から計量的実証分析を研究の基本方法とした。

この研究の一次的纏めとして、韓国農業の成長過程を国際比較の視野から、アジア地域の農業成長経路の観点より意味付けし、その段階別技術変化の特徴を理論的に整理、実証分析によって検証した。研究対象である韓国農業に対しては作物別、地域別、時期別成長過程と技術変化を分析し、更に日本農業との比較及び国際比較によって経済成長、農業発展、そして技術変化との関係を明確に究明し、学位論文として整理した。その一部は東洋文化研究所『紀要』に発表してある。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

日本農業経済学会。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「韓国の工業化と農村工業」(共著)『アジアの農村工業』1986年, 「韓国農業の成長過程と技術変化」『農業経済研究』62—3 1990年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

「韓国農業生産の技術変化に関する実証研究」(東大農学博士学位論文) 1991年10月, 「韓国農業の成長過程と技術変化——その経験と国際的意味」『東文研紀要』116 1992年3月。

猪口 孝 いのぐち たかし

1. 主要略歴

1944. 1 生, 1966 東大・教養・教養卒, 1968 東大大学院社会学・国際関係論・修士課程修了, 1969 上智大助手, 1970 マサチューセッツ工大政治学部大学院博士課程入学, 1974 同修了, 哲学博士 (Ph.D.) (マサチューセッツ工大), 同年 上智大外国語学部教授, 1977 東文研助教授, 同年 スイス出張, 1978 帰国, 1983 アメリカ出張, 1984 帰国, 1984 文献センター助教授併任 (1986まで), 1988 東文研教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

IX 所員の活動

過去25年間、国際政治と日本政治の理論と実証を中心にして研究を進めてきた。なかでも次の4個の主題が主要なものである。(1)東アジアの国際政治の分野で、『国際関係の数量分析：北京・平壤・モスクワ、1961年～66年』巖南堂書店 1970年、『外交態様の比較研究：中国・英国・日本』巖南堂書店 1974年、『交渉・同盟・戦争：東アジアの国際政治』東京大学出版会 1990年、(2)日本の国際関係の分野で、『国際政治経済の構図』有斐閣 1982年（台湾版、『二十一世紀国際政治経済の構図』渤海堂文化公司 1988年）、『国際関係の政治経済学：日本の選択と役割』東京大学出版会 1985年、『ただ乗りと一国繁栄主義をこえて』東洋経済新報社 1987年（中国版、『超越“坐蹭車”与一国繁栄主義』中国经济出版社 1991年）、*The Political Economy of Japan: The Changing International Context*, co-editor, Stanford University Press, 1988、『レヴァイアサン—日米関係特集』（編著）木鐸社 1989年、『湾岸を読む』（共著）プラネット・ブックス 1991年、『現代国際政治と日本』筑摩書房 1991年、*Japan's International Relations*, Pinter Publishers and Westview Press, 1991、(3)日本政治の分野で、『日本人の選挙行動』（共著）東京大学出版会 1986年（*Electoral Behavior in the 1983 Japanese Elections*, Institute of International Relations, Sophia University, 1986）、『族議員の研究』（共著）日本経済新聞社 1987年、『レヴァイアサン—自民党特集』（編著）木鐸社 1991年、『レヴァイアサン—東アジア比較政治体制特集』（編著）木鐸社 1990年、(4)政治理論の分野で、『社会科学入門』中央公論社 1985年、『国家と社会』（現代政治学叢書）東京大学出版会 1988年（中国版、『国家と社会』経済日報出版社 1989年、韓国版、『国家と社会』ナナム出版社 1990年）などを刊行した。上記の研究書のほかに多数の論文を日本語と英語で書いている。社会科学の引用索引として権威のある *Social Science Citation Index* に記録されているように、私の研究書・研究論文の多くは、国際学術研究書・研究論文のなかに引用されている。単独研究刊行のほかに、「現代政治学叢書」（東京大学出版会、1988年から刊行、現在17

巻既刊，全20巻予定）の責任企画編集，「叢書東アジアの国家と社会」（東京大学出版会，1992年から刊行予定，全6巻）の責任企画編集を行っている。『レヴァイアサン』（木鐸社，1988年）の編集同人として日本における政治学研究の進展に尽力している。また，*World Politics, International Organization, Journal of Japanese Studies, International Studies Quarterly, Journal of Conflict Resolution, Review of International Studies, International Journal, Journal of the Japanese and International Economies, Yearbook of International Political Economy* など国際的な一流学術誌の編集委員も務めている。

3. 教育活動（1990. 4～92. 3）

東京大学大学院法学政治学研究科 アジア・太平洋の力学 1990年度，国家と社会 1991年度，東京大学教養学部 政治学 1990，91年度，東京大学教養学部 アジア太平洋の国際政治 1990年度，お茶の水女子大学 政治学 1990，91年度。

4. 学内行政事務分担（1990. 4～92. 3）

統計学連絡委員会（1983年4月～現在），情報科学委員会（1987年4月～現在），国際交流委員会（1990年4月～現在）。

5. 学外活動（1990. 4～92. 3）

日本政治学会（理事），日本国際政治学会（理事），日本選挙学会（理事），アメリカ国際政治学会（Executive Committee Member），そのほかアメリカ政治学会，世界政治学会，日本計量学会，日本数理社会学会などの会員，経済審議会臨時委員（1992年1月～6月），政策構想フォーラム委員，日本国際フォーラム委員，構造改革フォーラム委員。

6. 過去の主要業績（1990. 3まで）

IX 所員の活動

『国際政治経済の構図』1982年、『現代日本政治経済の構図』1983年、
Co-editor, *The Political Economy of Japan*, 1988, 『国家と社会』1988年
(中国版 1989年・韓国版 1990), 『交渉・同盟・戦争』1990年。

7. 過去2年間(1990.4~92.3)の研究業績

『交渉・同盟・戦争：東アジアの国際政治』東京大学出版会 1990年、『現代国際政治と日本：パールハーバー50年の日本外交』筑摩書房 1991年、
Japan's International Relations, London: Pinter Publishers/Bouler, Col.:
Westview Press, 1991, 『超越坐踏車与一国繁荣主義』(楊伯江訳)中国経
済出版社 1991年、『国家と社会』(イー・ヒョン・チョル訳)韓国ナナム
出版社 1990年、『世界を読む』(共著)筑摩書房 1990年、『湾岸を読
む』(共著)プラネット・ブックス 1991年、『日米協力のあり方：責任分
担を中心として』日本国際フォーラム 1990年、『脱冷戦後の国際安全保
証：国連平和維活動』政策構想フォーラム 1990年、『国家と国際政治経
済学』田中浩編『現代世界と国民国家の将来』御茶の水書房 1990年、
「日米関係の理念と構造」『レヴァイアサン』1990年春季号, “The Politi-
cal Economy of Conservative Resurgence Under Recession: Public
Policies and Political Support in Japan, 1977-1983,” in T.J.Pempel, ed.,
Uncommon Democracies: The One-Party Dominant Regimes, Ithaca:
Cornell University Press, 1990, “Japan's Politics of Interdependence,”
Government and Opposition, Vol.25, No.4, Autumn 1990, 「社会科学」
『新教育学大事典』1990年, “Kemacetan (Deadlock) dalam Permasala-
han Kontinen dan Gangguan-gangguan Struktural di Psifik Barat,” R.A.
Scalapino, S.Sato, *Masalan Keamanan Asia*, 1990, 「誰のための政策か：
日本の政府支出と政策綱領(1967~87年)」(共著)『週刊東洋経済 臨時
増刊 近代経済学シリーズ』1990年12月22日, 「東アジア現代政治体制論」
『学術月報』44-2 1991年2月15日, “Asia and the Pacific since 1945:
a Japanese Perspective,” Robert H.Taylor, ed., *Handbook to the*

Modern World: Asia and the Pacific, New York: Facts on File, 1991, "Four Japanese Scenarios for the Future," Jeffrey A. Frieden and David A. Lake, eds., *International Political Economy: Perspectives on Global Power and Wealth*, New York: St Martin's Press, 1991, "Japan's Global Role in a Multipolar World," Shafiqul Islam, ed., *Yen for Development*, New York: Council on Foreign Relations, 1991, "The Nature and Functioning of Japanese Politics," *Government and Opposition*, Vol.26, No.2, Spring 1991, 「現代日本政治の性格と機能：回顧と展望」『思想』805号 1991年7月, 「現代日本政治の性格と機能」『季刊思想』(韓国) 夏季号 1991年6月, "Japan's Response to the Gulf Crisis: An Analytic Overview," *Journal of Japanese Studies*, Vol.17, No.2, Summer 1991, 「真珠湾50周年を迎える日本の外交」『中央公論』1991年6月号, "Change and Response in Japan's International Politics and Strategy," Stuart Harris and James Cotton, eds., *The End of The Cold War in Northeast Asia*, Melbourne, Longman Cheshire, 1991, 「通商問題の政治学」伊藤元重・奥野正寛編『通商問題の政治学』日本経済新聞社 1991年, 「自民党研究の複合的視点」『レヴァイアサン』9 1991年秋季号, "Japan's Foreign Policy in a Time of Global Uncertainty," *International Journal*, Vol. XLVI, No.4, Autumn 1991, 「冷戦後世界秩序と日本対外政策」『東文研紀要』116 1992年3月, 「グローバルな不確実性の下での日本の外交政策」『季刊思想』(韓国) 春季号 1992年4月, "Kebijaksanaan Luar Negeri Jepang dalam Ketidakpastian Global," *Jurnal Studi Jepang*, Vol. 1, No.1, Tahun 1991, "Japan's Role in International Affairs," *Survival*, Vol. 34, No.3, Summer 1992, 「国際貢献の政治学」『レヴァイアサン』臨時増刊 1992年6月, "Awed, Inspired, and Disillusioned: Japanese Scholarship on American Politics," Richard Samuels and Myron Weiner, eds., *The Political Culture of Foreign Area Research: Essays in Honor of Lucian W. Pye*, Washington, D.C.: Pergamon-Brassey's, 1992,

IX 所員の活動

「日本におけるアメリカ研究」『思想』1992年4月、「東アジア現代政治体制論」中嶋嶺雄編『東アジア比較研究』学術振興会 1992年、「政党支持率と内閣支持率」時事通信社・中央調査社編『日本の政党と内閣 1981年～1991年』時事通信社 1992年。

田中 明彦 たなか あきひこ

1. 主要略歴

1954. 8 生, 1977 東大・教養・教養卒, 同年 東大大学院社会学・国際関係論・修士課程入学, 同年 マサチューセッツ工大政治学部大学院博士課程入学, 1981 同修了, 哲学博士 (Ph.D.) (マサチューセッツ工大), 同年 東大大学院修士課程退学, 同年 平和・安全保障研究所研究員, 1983 東大教養学部助手, 1984 同助教授, 1990 東文研助教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

現在のところ、三つの大きな分野について研究活動を並行して進めている。第一は、近代世界システムの変動に関する理論的・実証的研究であり、第二は、国際政治の数量的分析であり、第三は、東アジアの主要国間の国際政治に関する現状分析である。

近代世界システムの変動に関しては、1989年に『世界システム』を出版して以来、その理論的展開の一つとして、山本吉宣氏らと戦争と世界システムの関係についての研究会を続け、その成果を『戦争と国際システム』(東京大学出版会)として1992年に発表した。また、科学研究費重点領域研究『高度技術社会のパースペクティブ』の一員として、世界システムと技術の関係についての研究も開始した。近代世界システムと、その他の世界システムとの関係、近代以前の世界における長距離交易ネットワークについても、初歩的な研究を開始した(科学研究費総合研究(A)「近代国際体系の拡大と広域交易網をめぐる国際関係」)。

国際政治の数量的分析については、大学院時代から行ってきたコンピュータ・シミュレーションの系譜があり、この成果は、前述の『戦争と国際システム』にその一部が報告されている。また、世界貿易データ、国際紛争データ、国連投票データなどに関する体系的なデータ収集と分析は、引き続き、浦野起央氏らと継続している。その一部の成果は、『アジア研究』（第36巻第2号、1990年2月）に「世界の中のアジア・太平洋地域と日本」と題する論文を発表した。

東アジアの国際政治に関しては、班研究「東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治」を中心に研究を進めてきたが、そのうち、日中関係については、1991年4月に『日中関係1945～1990』（東京大学出版会）という形で、概略をまとめた。また、東アジアをめぐる米中ソ3国関係の展開に関する理論的試論として、認知バランスの理論を応用して、『国際政治』（95号、1990年10月）に「友敵関係の移行理論と米中ソ三角関係」と題する論文を発表した。

国際的な共同研究として、アメリカのウィルソン・センターおよび英国の王立国際問題研究所などの研究者とともに、(旧)社会主義諸国における改革に関する比較研究に従事してきており、その成果は、1992年夏までには英文学術書として刊行される予定であり、筆者はそのうち一つの章を担当している。さらに、ワシントンにある国際戦略研究センターが中心となって行ってきた、日米両国のアジアとの経済関係という共同プロジェクトにおいては、武田康裕氏とともに、日本の対中国・ベトナム政策についての論文を作成した（これも1992年刊行予定）。

最近の国際政治の激動に関連して、国際政治の動向および日本の安全保障政策などについて時論を執筆することも多かった。

3. 教育活動（1990.4～92.3）

東京大学法学政治学研究科 現代東アジアの国際政治 1990, 91年度, 東京大学総合文化研究科国際関係論専攻 国際政治関係論 1990, 91年度,

IX 所員の活動

国際政治行動論 1990, 91年度, 東京大学教養学部 国際関係論 1990, 91年度, 国際体系演習 1990年度, 国際体系 I・II 1991年度, 筑波大学 国際関係学類 世界システム 1990年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

日本国際政治学会, アジア政経学会, 日本国際法学会, International Studies Association, 経済審議会臨時委員 (1990年10月~91年12月), 経済審議会臨時委員 (1992年1月~現在), 国民生活審議会臨時委員 (1991年12月~現在)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「中国の国際紛争行動のマクロ・モデル1950~1978」『アジア研究』29—1 1982年, 「『教科書問題』をめぐる中国の政策決定」岡部達味編『中国外交——政策決定の構造』日本国際問題研究所 1983年, “China, China-Watching, and China-Watcher,” Donald A. Sylvan and Steve Chan, eds., *Foreign Policy Decision-Making: Perception, Cognition, and Artificial Intelligence*, New York: Praeger, 1984, “From Prestige to Wealth to Knowledge,” (with Shumpei Kumon) Takashi Inoguchi and Daniel I. Okimoto, eds., *The Political Economy of Japan, Vol.2, The Changing International Context*, Stanford University Press, 1988, 『世界システム』東京大学出版会 1989年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

“American Foreign Policy and Problems of Regional Cooperation in Asia and the Pacific Region,” *The Korean Journal of International*

Studies, Vol.XXI, No.1, Spring 1990, 「対日関係」中国総覧編集委員会『中国総覧1990年版』霞山会 1990年, 「友敵関係の移行理論と米中ソ三角関係」『国際政治』95 1990年10月, “International Security and Japan’s Contribution”, *Japan Review of International Affairs*, Vol. 4, No. 2, Fall/Winter 1990, 『日中関係1945～1990』東京大学出版会 1991年, 『戦争と国際システム』(山本吉宣と共編著)東京大学出版会 1992年, 「天安門事件以後のアメリカの対中政策」『東文研紀要』116 1992年3月, 「『終焉論』をこえて」『外交フォーラム』1991年1月, 「内向するアメリカの苦悩」『経済往来』1991年1月, 「『世界新秩序』はなぜ霧の中なのか」『中央公論』1991年7月, 「見えてきた世界新秩序」『THIS IS 読売』1991年10月, 「国際システムの中の平和戦略」船橋洋一編著『日本戦略宣言——シビリアン大国をめざして』講談社 1991年。

友杉 孝 ともすぎ たかし

1. 主要略歴

1932.12生, 1959 東大・理・地学科地理学卒, 同年 アジア経済研究所調査研究部入所, 1973 同退所, 同年 立大文学部助教授, 1974 文学博士(立大), 1975 同教授, 1983 東文研教授, 1990 タイ出張(1992まで)。

2. 研究活動の概要・研究経過

タイ農村社会からタイ都市社会へと研究領域を拡げながら, 地域研究を行っている。この間, 一時期, スリランカー地方商業都市の研究を行う。1983年～88年である。農村から都市へと研究領域を拡げるために, タイとは異なるスリランカの都市を研究したのである。この研究成果は『スリランカ・ゴールの肖像—南アジア地方都市の社会史』として公刊された。

スリランカ都市研究は都市景観を手掛かりにして, 社会経済史を縦糸,

IX 所員の活動

文化についての記述を横糸にして、小さな都市社会を全体として認識する試みであった。

現在、バンコクの都市研究を行っている。約100年前のバンコクを全体として記述する試みである。拡大し続けるバンコクを相対化するために、旧バンコクを研究対象とした。旧バンコク内の一つの道路を取り上げ、この道路の歴史、さらにこの道路周辺に居住した人々の思い出を聞き取り、まとめつつある。国立文書館所蔵の文書から、この道路に関わる出来事を探索して、文書の新しい利用の仕方をも試みている。このバンコク研究は *Reminiscences of Old Bangkok* として公刊の予定である。

スリランカ都市研究もバンコク研究も都市誌として発表される。地誌すなわち一社会の全体的な記述は、社会を複眼的にみる地域研究の一つの大切な成果と考えるからである。断片化された情報の平板な羅列とはまったく異なり、複数の学問分野の有機的結びつき、すなわち社会を複眼的にとらえる試みとしての地誌である。

バンコク研究と平行して、タイ農村社会にも関心を持ち続けている。20年前に行った調査を基準にして、現在、大変に変化した農村社会を明らかにしたいと考えている。20年前の研究成果は *A Structural Analysis of Thai Economic History* として公刊された。市場経済が生活の隅々までゆきわたり、農村社会の変化はすさまじいほどである。市場経済を共通項にして、農村研究と都市研究は結びついている。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院理学系研究科地理学専攻 地誌研究・地誌学演習 1990年度、東京大学理学部地理学科 人類生態学 1990年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

日本民族学会。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

A Structural Analysis of Thai Economic History, 1980, 「タイ農村社会における市場とその多義性——比較経済体制論に向けて」『東洋文化』63
1989年, 「現代都市バンコクの景観にみられる記憶の表象——貨幣・仏教・王権」『東洋文化』69, 1989年, 『スリランカ・ゴールの肖像——南アジア地方都市の社会史』1990年, *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia* 東文研叢刊 1991年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

『スリランカ・ゴールの肖像——南アジア地方都市の社会史』同文館
1990年7月, *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia*,
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, 1991, 「ヤマニ村再訪——変容した農村社会, あるいは労働力市場形成」『東文研紀要』116
1992年3月, 「バンコク物語抄——道に残された記憶を求めて」『東洋文化』72 1992年3月。

松井 健 まつい たけし (1992. 4 採用)

1. 主要略歴

1949. 6 生, 1972 京大・理卒, 1974 京大大学院理・動物・修士課程修了,
1976 京大大学院理・動物・博士課程退学, 同年京大人文学研究所・助手,
1981 理学博士 (京大), 1983 神戸学院大学教養部助教授, 1990
同人文部助教授, 1991 同教授, 1992 東文研助教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

IX 所員の活動

異文化を理解し記述するための理論上の諸問題を、主として認識人類学とその具体的な方法の批判的検討から明らかにしようと試みてきた。物理的・生物的自然が、どのように概念化され命名分類されるかを明らかにすることを通して、そのなかに生活する人びとの自然認識を把握しようという問題設定から、1972年以来琉球列島をはじめ、フィリピン（バタン島）やアフリカ（ザイール東縁）での調査において、認識人類学の主要な方法である民俗分類やエスノ・サイエンスを実際に援用して、その特長と問題点を指摘してきた。同時に、認識人類学が方法上の要請から語彙を中心的な研究上の手がかりとしてきたのに対して、むしろディコースを重視することによって、その営為を自然から社会的な事象にまで拡大する手順を考案した。文化記述の方法、主題、その歴史的背景については、人類学や地理学の既存の理論枠よりも広い展望のもとに批判的検討をおこなっていくことを課題としたい。

理論的方法論的研究とならんで、西南アジア地域の乾燥地帯の記述研究にも重点をおいてきた。1978年のアフガニスタンの遊牧民調査以来、パキスタン（バルーチスタン）とインド西部（ラージャスターン）の砂漠地帯の生活について、民族誌的研究をおこなってきた。砂漠地帯の様々な生活の場において、いろいろなエスニック・グループ、宗教、生業様式などに分化適応している人びとが、これらの地域において、相互にどのようにかかわりながら生活世界を構成しているのかを比較研究から明らかにしようと企図している。ここから、西南アジアの砂漠文化と呼ぶことができるような特質を措定して、それを記載するための基本的なパラダイムを探ることを課題としている。当面、遊牧という生活様式の特質を西南アジア的視野のなかで解明し、英国植民地時代前後の地域政治史とのかかわりを考察していきたい。

3. 教育活動（1990. 4～92. 3）

神戸学院大学教養課程 人類学 1990, 91年度, 教養演習 1990, 91年

度、東京都立大学大学院社会人類学専攻 西南アジア民族誌 1990年度、
東京外国語大学ペルシア語学科 ペルシア事情概説 1991年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

日本民族学会、国立民族学博物館研究協力者・共同研究員。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活——北東アフガニスタンにおけるドゥラニ系パシュトゥン族調査報告』京都大学人文科学研究所 1980年、『自然認識の人類学』どうぶつ社 1983年、『家畜群構成と牧畜経営類型——アフガニスタンの牧畜諸族に関する民族誌的覚書』福井勝義・谷泰 (編著) 『牧畜文化の原像』日本放送出版協会 1987年、『琉球のニュー・エスノグラフィ』人文書院 1989年、『セミ・ドメスティケーション——農耕と遊牧の起源再考』海鳴社 1989年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

『認識人類学論攷』昭和堂出版 1991年11月、『西南アジアにおける乳製品とその加工技術』『ヘルス・ダイジェスト』5-4 1990年8月、『アフガニスタン紛争の文化的要因』『海外事情』38-12 1990年12月、『バルーチ族のヤシ文化』掛谷誠・田中二郎 (編著) 『ヒトの自然誌』平凡社所収 1991年3月、『バルーチスターン・マクラーン地方の農業と社会』阪本寧男 (編著) 『インド亜大陸の雑穀農牧文化』学会出版センター 1991年12月、『ナツメヤシと一体化した民——砂漠とオアシスの小宇宙』『神戸新聞』1990年6月22日、『書評・周達生『民族動物学ノート』』『産経新聞』1990年7月5日、『映画『老人と海』礼賛』『民博通信』50 1990年12月、『書

IX 所員の活動

評・谷泰（編著）『文化を読む』、『産経新聞』1991年2月28日、「文化の時代の柳宗悦」『新沖縄文学』88 1991年6月（『民藝』469 1992年1月に再録）、「書評・周達生『東アジアの食文化探険』」、『産経新聞』1991年7月25日、「書評・松原正毅『遊牧民の肖像』」、『民博通信』56 1992年3月、「ものと名前の人類学」『HaS（神戸学院大学人文学会）』2 1992年3月。

末成 道男 すえなり みちお（1990.8採用）

1. 主要略歴

1938.3生，1962 東大・教養・教養卒，1964 東大大学院生物・人類学・修士課程修了，1970 東大大学院社会学・文化人類学・博士課程退学，同年 学術振興会奨励研究員（1972まで），1971 社会学博士（東大），1972 聖心女子大文学部専任講師，1975 同助教授，1983 同教授（1990まで），1987 北京外国語学院，日本学研究中心客員教授，1989 ピッツバーグ大学客員教授，1990 東文研教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

東アジア社会の比較研究。主に，家族親族，村落，年齢原理，宗教活動の社会的側面を主要なテーマとしてきた。

日本では，1962年から岩手県水沢・江刺・三陸・対馬で開始した短期調査を重ねながら，主に農村・町・漁村の同族，年齢原理などのテーマで発表した。台湾原住民については，1966年を皮切りにパイワン族の家族親族とくに長子への贈与慣行，プユマ族の祖先の霊屋および位牌祭祀と漢化，アミ族の母系類似の非単系制と年齢階梯制，サイシャット族の祖先祭祀についての人類学的調査を行ってきた。台湾の漢族についての本格的調査は，1976年中部福建集落の社頭で，かつて耕地の三分の一にも及んでいたリニージの共有財産を中心に祖先祭祀を調べたのに始まる。この際，年寄

りの手書きの文書が日本の地方文書のように人類学的調査にあっても有効であることを痛感した。1985年からは北部客家農村の調査を行っている。韓国調査では、1973年の両班村落調査をはじめ、東部漁村における1979年より一年間の住み込み調査で非両班社会における儒教的伝統の浸透と巫俗的慣行の問題を扱った。中国大陸では台湾客家の原郷でもある広東省梅県の調査を1987年以来数次にわたって続けている。こうした調査をふまえ東アジア諸社会の比較研究を試みてきたが、今後も現地社会との接触を保ちその変容過程を追いたいと考えている。

現在はとくに次の3点に関心を持っている。①少数民族および周辺民族の漢化問題は、これまで進めてきた原住民と漢族の研究双方にかかわり、漢族社会やその文化の形成過程の考察ならびに、原住民の現状の把握および将来の予測に当たっても重要なテーマである。②人類学における歴史的資料の利用：観察を主体とする人類学的研究であっても東アジアを対象とする限り避けて通れない課題である。歴史学の研究とどのような相互協力関係が可能なのかを多方面にわたり考えてゆきたい。③東アジアにおける異文化理解：東アジアにおいて自文化理解とどのような質差が見られるのかを中心に日本における人類学の可能性との関連において考察を進めたい。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻 社会人類学特殊研究III
1991年度, 東京大学教養学部教養学科 地域民族誌II 1991年度, 東京大学教養学部全学一般教育ゼミナール 人類学から見る中国社会 1991(夏)年度, 聖心女子大学文学部人間関係学科 民族誌I (台湾民族誌) 1991年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

大学院総合文化研究科委員会 (1991年4月~1992年3月), 旧宇宙航空研

IX 所員の活動

研究所跡地利用委員会（1991年4月～1992年3月）。

5. 学外活動（1990.4～92.3）

日本民族学会（理事）、東洋学研究連絡委員（日本学術会議）。

6. 過去の主要業績（1990.3まで）

「東浦の村と祭——韓国漁村調査報告」『聖心女子大学論叢』59 1982年、
『台湾アミ族の社会組織と変化』1982年、『仲間』（共著）1984年、「年齢層
序制」『人類科学』37 1985年、『文化人類学：特集＝漢族研究の最前線
——台湾・香港』5 アカデミア出版 1988年。

7. 過去2年間（1990.4～92.3）の研究業績

『文化人類学：特集 中国研究の視角』8（編訳著）アカデミア出版
1990年12月、『東南中国の宗族組織』（フリードマン M. 著 共訳）弘文
堂 1991年3月、『中国に関する文化人類学的研究のための文献解題（平
成三年度科研費研究成果報告書）』（編著）1992年3月、『鶴ヶ島町史』民
俗篇（監著）1992年3月、「伯公考—台湾客家系農村の事例より」『民族文
化の世界——儀礼と伝承の民族誌』上 小学館 1990年4月、「韓国と中
国漢族の大小リネージの比較」『韓国社会の文化人類学』（杉山晃一・桜井
哲男編）弘文堂 1990年11月、「台湾漢族の信仰圏域」『国立民族学博物館
研究報告別冊』14 1991年3月、「鳥居龍蔵の足跡」『乾板に刻まれた世界
——鳥居龍蔵の見たアジア』（東京大学総合研究資料館特別展示実行委員
会編）1991年2月、「功德儀礼の二つの型——台湾の事例を中心に」『東文
研紀要』116 1992年3月。

関本 照夫 せきもと てるお

1. 主要略歴

1947. 1 生, 1972 東大・教養・教養卒, 1974 東大大学院社会学・文化人類学・修士課程修了, 1976 同博士課程退学, 同年 国立民族学博物館助手, 1981 一橋大社会学部専任講師, 1983 同助教授, 1986 東文研助教授併任, 1987 東文研助教授, 一橋大社会学部助教授併任, 1990 国立民族学博物館助教授併任, 1991 東文研教授, 同年 国立民族学博物館教授併任。

2. 研究活動の概要・研究経過

主要なテーマは、文化人類学の立場からの農民社会の文化と政治の研究。国家の支配秩序と、農村の日常生活を秩序づける文化的・宗教的な規範や慣習との相互作用を明らかにすること、また一見安定した文化秩序をつくりだす背後の政治力学に関心がある。主な研究地域は、東南アジア、とりわけインドネシア・ジャワの農村社会。1975年, 1978~79年, 1980年, 1986年に中部ジャワ, スラカルタ地方の稲作農村でフィールドワークを行う。調査は村と家族の構成, 社会関係の特徴, 経済活動, 村の儀礼サイクル, 信仰の諸相, 権威や秩序に関する農民の観念と言説, 草の根における国家支配や国民形成の動向におよぶ。1987~88年には, マレーシア・スランゴール州のジャワ人移民の村で, また, 1991~92年には南米スリナムのジャワ人移民社会で, ことなる政治・社会環境のもとでのジャワ文化の変容と持続を比較するための調査を実施。この間, 1982~84年には国際文化会館新渡戸フェローとしてカリフォルニア大学バークレー校人類学部に, 1988年にはロンドン大学経済政治学校 (LSE) サントリー・トヨタ経済研究センター・フェローとして同校人類学部に滞在, 農民社会の文化と政治をめぐる比較研究をおこなう。小さなコミュニティでのフィールドワークにより, 生活の中の人々の行為とことばを微細に捉ええることを主要な方法にしているが, これと関連して, 第一に, 過去の東南アジア (前植民地期) における王権支配の構造の研究, 第二に, 今日の東南アジアにおける国民国家的支配伝統の創造, 地方的伝統と国民的文化・大衆文化との相

IX 所員の活動

相互作用についても、研究を進めている。

3. 教育活動 (1990. 4～92. 3)

東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻 文化理論 I 1990年度, 社会人類学特殊研究 I 1990年度, 文化人類学特別研究 1990, 91年度, 文化人類学特別演習 1990, 91年度, 文化理論 II 1991年度, 社会人類学特殊研究 IV 1991年度, 東京大学教養学部教養学科 文化人類学理論 II 1990, 91年度, 文化人類学 1990年度, 社会の構造 1991年度, 埼玉大学教養学部 文化人類学 1990年度, 千葉大学文学部 人類学 1991年度, 同教養部 社会学 1991年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4～92. 3)

総合研究資料館運営委員会 (1990年 4月～92年 3月), 留学生センター運営委員会 (1991年 4月～92年 3月)。

5. 学外活動 (1990. 4～92. 3)

国立民族学博物館第二研究部教授 (併任), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員, Japan-Southeast Asia Forum Co-Chair (1990年 4月～92年 3月)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3まで)

「二者関係と経済取引——中部ジャワ村落経済生活の研究」『国立民族学博物館研究報告』5-2 1980年, 「サウイト事件の文化論的考察」鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究』東京大学出版会 1982年, 「東南アジア的王権の構造」伊藤・関本・船曳編『現代の社会人類学』3 1987年, 「マレー半島のジャワ人移民社会——サバ・ブルナム調査ノート」『東文研紀要』109 1989年, 「ジャワにおける儀礼と食物——スラムタン儀礼の供物の象徴性」松原正毅編『人類学とは何か——言語・儀礼・象徴・歴史』日

本放送出版協会 1989年。

7. 過去2年間(1990.4~92.3)の研究業績

“State Ritual and the Village: An Indonesian Case Study,” in *Reading Southeast Asia*, Vol.1, Cornell University Southeast Asia Program, 1990, 「ジャワの正義王思想」『シリーズ世界史の問い 6:民衆文化』岩波書店 1990年, 「二者関係ネットワーク論再考——東南アジアの事例」『中国——社会と文化』6 1991年, 「現代マレーシアにおけるマレー民族主義とイスラム」『「イスラムの都市性」全体集会報告書』第三書館, 1991年, 「ジャワ人のヒエラルキーと自由——村人の集いの二つの形」『東文研紀要』116 1992年, 「礼式に守られた世界秩序——東南アジア多島海の戦争と平和」『週刊朝日百科 世界の歴史77 戦争と平和』朝日新聞社 1990年, 「アジアを向く日本・欧米を向くアジア——新たな普遍的言語で語り合えるか」(座談会, 関本照夫・大久保昭・鈴木勝也・スリチャイ・ワンガエーオ) 大沼保昭編『国際化・美しい誤解が生む成果』東信堂 1990年, 書評「モーリス・レーナルト『ド・カモ』」『朝日ジャーナル』33-4 1991年, 「足羽與志子『王の不在と仏教国家』へのコメント」松原正毅編『王権の位相』弘文堂 1991年, 書評「ジョセフ・ダーソー『アメリカンドリーム』」『朝日ジャーナル』33-20 1991年, 「コメント・網野説へのいくつかの疑問」川田順造編『「未開」概念の再検討・II』リプロポート 1991年。

福嶋 真人 ふくしま まさと

1. 主要略歴

1958.8生, 1981 東大・教養・教養卒, 1983 東大大学院社会学・文化人類学・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 同年 インドネシア留学, 1985 帰国, 1988 同博士課程退学, 同年 東文研助手。

2. 研究活動の概要・研究経過

文化人類学が従来理論形成に関して応用してきた様々なタイプの言語モデルに対して、近年多くの批判が投げかけられている。例えば構造言語学やテキスト理論、言語行為論等がそうした具体的な例であるが、とりわけ儀礼を含む、慣習化された行動の分析においては、こうした言語モデルには明らかに限界があり、当事者の非自覚的な行為と、それについての彼ら自身の説明が持つ複雑な関係を、これらのモデルはうまく表現できないでいる。その意味で行為の当事者が明確に意識しない身体化された実践を、より微細に研究する為には新たなアプローチが必要であり、近年盛んになっている認知科学的方法はその手掛かりを与えるある種の試みであるといえる。とりわけ社会学的に「ハビトゥス」という形でブラックボックス化された装置の内部システムを分析する手段としては有効である。しかし一方で認知科学が提供する、認知活動の極めて基礎的なレベルの分析と、社会学的な高次の解釈行為の間には未だにかなりのギャップがあり、この中間部分の広大な領域が現在の筆者の関心領域の中心に位置する事になる。

そうしたギャップを埋める幾つかの実際的な研究としては、広義の儀礼的行為一般（即ち挨拶行為から始まって宗教的な儀礼体系、更には様々なタイプの民俗芸能的なもの）に於ける、自覚的な解釈行為と無意識の身体的なパターンの関係を探る事が挙げられる。筆者の「説明の様式について」および「儀礼とその積義」はそうした試みの一端であるが、ここでは未だこの二つのレベルが方法論的に切断され、その複雑な関係が図式的に示される段階に止まっている。その意味で、この二つの関係を分析する為の枠組みとして発生論的な観点（とりわけ身体的訓練の長期的な形成についての研究、およびより基本的な発達心理学的な研究）がある程度有望であると思われる。

もう一つのターゲットは、こうした儀礼的行為と、それに対しての反照作用のメカニズムを明らかにする事である。従来儀礼研究は、こうした

儀礼行為の持つ慣習的強制力を強調するのが主であったが、その対象をより広い範囲の形式的行為にまで拡大すると、そこにはこうした形式化の絶えざる崩れの問題が観察される。ゴフマンが詳細に分析したように、ある経験の形式化（フレーム）は反照作用によって常に流動化されうるのである。こういった社会学的な観察と、従来の儀礼／慣習行為論の総合もまた、現在の筆者の関心の一つである。

3. 教育活動（1990. 4～92. 3）

聖心女子大学 社会学 1990(夏)年度。

4. 学内行政事務分担（1990. 4～92. 3）

なし

5. 学外活動（1990. 4～92. 3）

日本民族学会，オセアニア学会。

6. 過去の主要業績（1990. 3まで）

「イスラム・リーダーにおける信念と演技——ジャワ伝統派イスラム，意識とその変容」『季刊人類学』17—3 1986年，「閉ざされた言語——サミン運動とその言語哲学」『東南アジア研究』24—4 1987年，「内なる王国を求めて——ジャワ農民運動（サミン運動）に於ける権力否定とその帰結」『アジア・アフリカ言語文化研究』33 1987年，“*Kebatinan Mystical Sects and the Meaning of Sprit Possession in Javanese Culture*” *Man and Culture in Oceania* 3 1987，「内面と力——ジャワ神秘主義と伝統的政治モデル」『民族学研究』52—4 1988年。

7. 過去2年間（1990. 4～92. 3）の研究業績

「サミンからサンティ・アソックへ」『オセアニア学会 Newsletter』3

IX 所員の活動

1990年、「剣と聖典のはざままで——東南アジアに於ける二元的主権，王権，現代政治」『王権の位相』弘文堂 1991年、「信仰の誕生——インドネシアに於けるマイナー宗教の闘争」『東文研紀要』113 1991年、「書評 西野節男『インドネシアのイスラム教育』」『東南アジア研究』1991年、「早池峰・ガラパゴス・ユルゲン=ハバーマス——第一民俗芸能学会についての覚書」『正しい民俗芸能研究』1991年、「説明の様式について——あるいは民俗モデルの解体学」『東文研紀要』116 1992年3月、「儀礼とその積義——形式的行動と言語的解釈」橋本他編『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房 1992年（印刷中）、「もう一つの『瞑想』——サンティ・アソック [仏教原理主義運動] について」田辺繁治編『地平としての上座部仏教研究（仮題）』京都大学出版 1992年（印刷中），“The Birth of Belief: Struggle of the Minority Religions in Indonesia”, *Spirit Cult and Popular Knowledge in Southeast Asia* (Forthcoming).

岡本 サエ(兼) おかもと さえ

1. 主要略歴

1941. 3 生，1964 東大・教養・教養卒，1966 東大大学院人文・比較文化・修士課程修了，同年 同博士課程入学，同年 パリ大文学人文学部博士課程に留学，1969 同修了，パリ大学博士 Docteur de l' Université de Paris，同年 東大大学院博士課程退学，同年 東大教養学部助手，1971 東文研助手，1977 同退職，同年 東大教養学部非常勤講師，同年 千葉大教養部助教授，1990 文献センター教授，東文研教授併任，1991 文献センター主任併任。

2. 研究活動の概要・研究経過

前近代（日本の江戸時代にあたる時期）の中国におけるものの見方，考え方を，比較思想の視点から探ってきた。具体的には，1) 清代禁書 2) 中

西文化交流に焦点を絞って研究を進めている。

- 1) 18世紀後半の乾隆禁書が大部分16・17世紀の著作を対象としている事実に注目し、明末清初の奔放な時代精神が、いかに育まれ、開花し、そして満人王朝の下でいかに抑え込まれて行ったかを、同時代の日本やヨーロッパの状況も視野に入れつつ総合的に考察している。紀要に連載中の論文「乾隆禁書」では、禁書を出来るだけ網羅的に読む作業を続ける事によって、禁書著者のグループ分けを行い、彼らの作品が思想的にも空間的にもいかなる広がりを見せていたかを明らかにしようとする。次いで清朝当局の論理、並びに社会事象としての禁書事件が中国社会に与えた影響を分析し、清代思想界の構造的解明をめざす。
- 2) ヨーロッパの一方的な接近によって16世紀前半に始まった中国と西洋の交渉が、19世紀に至るまでの両文化圏の文化変容・伝播にいかなる足跡を残したかを、欧文資料と漢籍の併用により検証し、それによって中華意識が強く異国文化に関心が薄いと言われてきた中国の人々の比較思想を概観しようとしている。論文「中国とヨーロッパの文化交流」(印刷中)では、交流現場における中国人の意識を追跡し、明末の無政府状態が通商と「西学」導入の機会を作り、次いで清朝首脳の外交易験の欠如と内治重視が交流の挫折を招いたが、その底流には儒家の華夷思想が一貫して存在していた事を指摘した。

他方、紀要論文「中国人の比較思想」では、17世紀前半の福建省で記録されたイタリア人宣教師と文人達との対話を検討し、明末の人々がタブーもなく、天主と城隍神の比較、四元論と五行説の相違、人間の本性に対する視点等、東西文化の本質に迫る問題を闊達に論じていたことを明らかにした。本年は、欧文資料の検討を進めつつ、徐光啓の評伝、ヨーロッパと東アジアの文化伝播等のテーマに取り組んでいる。

IX 所員の活動

研究協力としては、1969年 (No. 8) 以来寄稿しているフランスの中国文献紹介誌 (*Revue bibliographique de Sinologie*) に対し、思想・歴史分野での書評分担を継続する。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院人文科学研究科中国語中国文学・中国哲学専攻 清代の思想と文学 1990, 91年度, 中国哲学特殊研究 1990, 91年度, 東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻 比較文明論演習 1990(冬), 91年度, 東京大学教養学部全学一般教育ゼミナール 中国の比較思想 1990(夏)年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

比較思想学会, 日仏東洋学会, 東大中国学会 (評議員)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「弑臣論」『東文研紀要』68 1976年, 「清代禁書——その著者たちの思考 (上)(下)」『東文研紀要』73, 112 1977, 1990年, 「明清思想 対西欧文化輸入的認識特点」『湖南大学学报』14-1 1987年, 「気——中西思想交流の一争点」『東洋文化』67 1977年, 「環境への眼差し——中国人の思想空間」『文学空間』1989年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

「乾隆禁書(一)——著者たちのプロフィール」『東文研紀要』115 1991年3月, 「中国とヨーロッパの文化交流」『中世史講座』11 学生社 1992 (印刷中), 「中国人の比較思想——《口鐸日抄》の対話から」『東文研紀要』

117 1992年3月,「十八世紀大編纂事業の全容」(書評)『中国図書』1990年11月,「清代精神史の総合的研究」(書評)『東方』132 1992年3月,中国研究文献紹介 n° 53, 458. *Revue Bibliographique de Sinologie*, VII 1990年10月。

東アジア部門 (第一)

斯波 義信 しば よしのぶ (1991. 3 停年退職)

1. 主要略歴

1930.10生, 1953 東大・文・東洋史卒, 1955 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1956 東洋文庫研究生 (1961まで), 同年 学術振興会奨励研究生 (1961まで), 1960 東大大学院博士課程修了, 1961 熊大法文学部助教授, 同年 文学博士 (東大), 1969 阪大文学部助教授, 1979 同教授, 1983 阪大評議員, 1986 東文研教授, 阪大文学部教授併任 (1987まで), 1988 東文研所長及び東大評議員並びに文献センター長, 1990 同退任, 1991 東文研教授停年退職, 同年 国際基督教大教養学部教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

はじめ, 中国の社会経済の構造や動態に関心をもち, まず唐宋変革期における商業・流通事情の克明な復元につとめ, 『宋代商業史研究』を著した。また『宋代史食貨史訳注(-)』を共同執筆して, 米を中心とする穀物を政府が買い上げる制度の推移を, 市場, 流通, 生産機構に関わらせて明らかにした。

ついで, 研究対象を必ずしも宋代のみに限定せず, 宋元明清の都市史, 海外貿易史, 水利開発史, 移住定住史などの分野に広げたが, 地域的限定を付するの必要を感じ, D. Twitchett 教授の勧めで米国の人類学者 G. W. Skinner 教授の指導を受けることになり, 同教授の構想する Regional Systems Analysis の研究協力メンバーとなって数次渡米し, 幾つかの関連の国際会議に出席した。一口にいえば, この方法は一定の分析枠組を共有しながら, 地方や地域の精密なエスノグラフィーを叙述し, その成果を

同類の研究と彼此比較しつつ個別性と全体性の関連を解くものである。

こうして、具体的には寧波と紹興を含む寧紹サブリジョンの歴史を唐から民国まで叙述し、これに平行して長江下流大地域の社会経済的発展史の諸相を究明した。この研究の成果は、G. W. Skinner 編『後期中華帝国の都市』、J. Haeger 編『宋代の危機と繁栄』、M. Rossabi 編『対等諸国のなかの中国』に収められたほか、1988年に『宋代江南経済史の研究』と題する自著のなかにまとめて公刊した。

また此の寧紹地域の歴史叙述と関連して、中国における国内及び海外移住史の研究にも取組み、日本の函館に来住した寧波出身華僑の研究『函館華僑関係資料集』ほか、幾つかの華僑研究を発表している。

3. 教育活動 (1990. 4～92. 3)

東京大学経済学部 中国経済史 1990年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4～92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4～92. 3)

社会経済史学会 (常任理事)、財団法人東洋文庫 (理事・図書部長)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

共訳書『宋代食貨志訳注(-)』1960年、『宋代商業史研究』1968年、*Commerce and Society in Sung China*, tr. by Mark Elvin, 1970、『函館華僑関係資料集』1982年、“Ningpo and Its Hinterland”, G. W. Skinner, ed., *The City in Late Imperial China*, 1977、『宋代江南経済史の研究』東文研報告 1989年。

7. 過去2年間 (1990. 4～92. 3) の研究業績

IX 研究活動

「華僑」『世界史への問い 3 移動と交流』岩波書店 1990年10月, “Correlation Among Levels of Productivity, Population, and Urbanism in Sung Kiangnan”, Peter M. Kuhfus (Hrsg), *China: Dimensionen der Geschichte—Festschrift für Tilemann Grimm anlässlich seiner Emeritierung*, Tübingen: Attempto Verlag, 1990, 「浙江省餘杭県南湖水利始末」『布目博士古稀記念論集——東アジアの法と社会』汲古書院 1990年5月, “Commercial Differentiation in a Chinese City: The Example of Ningpo in the 1930s”, *East Asian Cultural Studies* 29: 1-4, 1990, 「宋代の都市にみる中国都市の性格」『歴史学研究』614 1990年12月, 「解説」M・フリードマン著 末成道男・西沢治彦・小熊誠訳『東南中国の宗族組織』弘文堂 1991年3月。

濱下 武志 はました たけし

1. 主要略歴

1943.11生, 1972 東大・文・東洋史卒, 1974 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1977 東洋文庫奨励研究員 (1979まで), 1978 東大大学院博士課程退学, 同年 香港大センター・オブ・エイジアン・スタディーズにパートタイム・リサーチ・アシスタント (1979まで), 1979 一橋大経済学部専任講師, 1981 同助教授, 1982 東文研助教授, 1988 同教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

東南アジア華人と中国華南との歴史的な結びつきを, 香港に焦点を当てて研究・調査を行っている。その内容は, 華僑送金のメカニズムと, 華南・東南アジア間の商業ネットワークを明らかにすることである。香港においては, 貿易・貿易金融の検討に加え19世紀後半の土地改革, 商業組織, 外国銀行, 地域組織などを調査している。1997年の返還後も見通すような

研究を行いたいと考えている。

3. 教育活動 (1990. 4～92. 3)

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻 中国近代経済史 1990年度, 中央大学文学部東洋史 東洋近代史 1990年度, 九州大学文学部 東洋史 中国近代史 1990年度, 高知大学文教育学部 中国近代史 1990年度, 国際基督教大学 中国史 I 1990年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4～92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4～92. 3)

社会経済史学会 (理事・編集委員), アジア政経学会 (編集委員), ユネスコ日本支部編集委員, 沖縄県教育委員会『歴代宝案』編集委員。

6. 過去の主要業績 (1990. 3まで)

「近代中国における貿易金融の一考察」『東洋学報』78—3・4 1978年, 『中国近代経済史関係解説つき文献目録』1980年, 「世界資本主義とアジア民族資本」『社会経済史学の課題と展望』1984年, 『中国近代経済史研究——清末海関財政と開港場市場圏』東文研報告 1989年, 『近代中国の国際的契機』1990年。

7. 過去2年間 (1990. 4～92. 3) の研究業績

『近代中国の国際的契機——朝貢貿易システムと近代アジア』東大出版会 1990年, 「「華僑」史に見る社会倫理——華僑・華人・華裔のアイデンティティ」『思想』801 1991年3月, 「銀で結ばれた世界経済—16～19世紀」『世界史への問い』4巻 (近代世界の構造) 岩波書店 1991年, 「中国と東南アジア」石井米雄編『東南アジアの歴史』東南アジア学講座 4 弘

IX 研究活動

文堂 1991年、「現代中国の商業史」野村浩一編『もっと知りたい中国』
弘文堂 1991年、「東アジアにおける香港の歴史的位罫」『創文』320
1991年4月、『アジア交易圏と日本工業化1500—1900』（共編著）リプロ
ポート 1991年、「ジャーデイン・マセソンと香港上海銀行」『月刊しにか』
2—7 1991年7月, Asian Perspective and Sun Yat-sen 孫中山記念
East-West Center 会議 1991. 8, Contemporary China and the Study
of Modern History: Towards an Understanding of Chinese Society
(*Acta Asiatica* 62 1992), 「移民と商業ネットワーク——潮州グループ
のタイ移民と本国送金」『東文研紀要』116 1992年3月。

小島 毅 こじま つよし (1992. 4 転出)

1. 主要略歴

1962. 5 生, 1985 東大・文・中哲卒, 1987 東大大学院人文・中哲・修
士課程修了, 同年 東文研助手, 1992 徳島大学専任講師昇任。

2. 研究活動の概要・研究経過

中国社会文化史, 特に中国文明における「礼」の特質と, その政治的・
社会的意義の解明を研究課題としている。具体的には, 次の二つの局面か
らのアプローチを試みている。

① 中国の政治的・社会的秩序を維持・安定させるうえで, 国家祭祀が
果たした役割。皇帝がみずから首都郊外で執り行う天の祭りや, 地方
官が皇帝の委任を受けた形で行う各地での祭礼を取り上げ, その思想
史的意義を論じた。その際, 従来の研究が礼制そのものの解明を目的
としていたのとは異なり, ある礼制がどのような社会的意味をもって
いたかに重点を置いてこれを分析した。

② 上で論じた祭祀体系を支える思惟構造の解明。皇帝は天命に基づい
て統治しているとする政治思想が, どのように展開していったか, ま

た、その政治思想がどのような宇宙論に支えられていたかを分析した。

この2年間は、国家祭祀と民間信仰の関係に焦点を絞り、西暦12世紀から19世紀にわたる、宗教文化の構造と変容の解明を志してきた。城隍神・関帝・媽祖などの神々がそれぞれどういう経緯で国家祭祀の中に組み入れられたか、また、朝廷や儒者たちは民衆が信仰している神々をどう分類し、評価していたかといった点を分析した。

以上の作業にあたり、文献資料として日本国内で利用可能な漢籍（近年影印その他の形で出版されたものを含む）だけでは不十分であり、海外の図書館に収蔵されている書籍の調査・閲覧が必要である。また、祭祀の研究にあたっては、現在行われている祭礼の現地調査・分析も不可欠である。このため、1989年4月から90年6月まで（この間4カ月は中断）は北京・アモイにおいて、1991年10月から92年3月までは台北において、上記の調査を目的とする海外研修を実施した。

「礼」の社会性を考察するにあたり、中国という一つの政治的領域内に見られる地域的多様性をもたらす影響に留意している。また、この問題を中国学の枠の中でのみ考えるのではなく、他の文明との比較を通してその特質を明らかにするべく、比較文化の研究班にも所属している。

3. 教育活動（1990.4～92.3）

なし

4. 学内行政事務分担（1990.4～92.3）

なし

5. 学外活動（1990.4～92.3）

東大中国学会、日本中国学会、東方学会、史学会。

IX 研究活動

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「宋朝士大夫の研究をめぐって」『中国——社会と文化』1 1986年, 「宋代天譴論の政治理念」『東文研紀要』107 1988年, 「郊祀制度の変遷」『東文研紀要』108 1989年, 「宋代の楽律論」『東文研紀要』109 1989年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

「城隍廟制度の確立」『思想』792 1990年6月, 「天子と皇帝——中華帝国の祭祀体系」松原正毅編『王権の位相』弘文堂 1991年2月, 「正祠と淫祠——福建の地方志における記述と論理」『東文研紀要』114 1991年2月, 「中国儒教史の新たな研究視角について」『思想』805 1991年7月, 「牧民官の祈り——真徳秀の場合」『史学雑誌』100—11 1991年11月, 「宋代の国家祭祀——『政和五礼新儀』の特徴」池田温編『中国礼法と日本律令制』東方書店 1992年3月, 「嘉靖の礼制改革について」『東文研紀要』117 1992年3月, 「太公望から関羽へ——国家祭祀における軍神の変質」『日中文化研究』3 1992年5月 (印刷中)。

池田 温 いけだ おん (1992. 3 停年退職)

1. 主要略歴

1931. 12生, 1954 東大・文・東洋史卒, 1956 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1957 東洋文庫研究生, 1959 学術振興会奨励研究生 (1961まで), 1961 同博士課程退学, 同年 東洋文庫嘱託, 同年 東大文学部助手, 1964 北大文学部助教授, 1971 東文研助教授, 同年 文献センター助教授併任 (1974まで), 1976 同教授, 1983 文献センター主任 (教授) 併任 (1984まで), 同年 学士院賞受賞, 1990 東文研所長及び東大評議員並びに文献センター長, 1992 停年退職。

2. 研究活動の概要・研究経過

中国古代・中世史（魏晉南北朝・隋唐）および前近代東アジアの文化交流史を専攻。班研究は十数年来〈律令制の比較史的研究〉ついで〈東アジア前近代官僚制の研究〉を所内外の方々の協力を得て進めてきた。そこでは中国史と日本古代史及び朝鮮史専攻者が法制史専攻者と一堂に会し、毎月曜夜に『唐律疏議』『唐令』『養老令』『雲夢秦簡』『名公書判清明集』等を会読し、東アジア古代の法典と法の施行、適用状況について理解を深めるに努め、比較史的追求を試みてきた。この研究会には正規の班員の他、少なからぬ大学院生や外人研究員の方の参加を得て、多角的な情報、知見の交流を行うことができた。成果の一端は東洋文化の特集2冊、〈律令制の比較史的研究のために〉（60、1980年）〈東亜古代国制試探〉（68、1988年）と論文集『中国礼法と日本律令制』（1992年）に収められている。

この班研究と関連して故仁井田陞先生の『唐令拾遺』に補訂を加え、唐令復原作業を進める仕事が進行中で、一二年内に完成をめざしている。

他方吐魯番・敦煌文書に含まれる戸籍・計帳・差科簿等の公文書を利用して、唐代前期を中心に当代の家族や公課制、均田制等の給田の実態を解明する研究を継続しており、同時に契約文書類の私文書の分析を通じ、古代における田地の賃貸借の普及や奴婢の実情等に見通しを得ようとした。吐魯番・敦煌文献は中国中古史の根本史料として重要な価値をもつので、それらを系統的に整理すべく可能な限り原本（英仏中独露日に散在）について正確な録文を作製するに努め、『中国古代籍帳研究概観・録文』（1979年）及び山本達郎共編『敦煌・吐魯番社会経済史料集Ⅲ契約文書，解説録文・図版』（英文1986，87）を公刊した。又敦煌写本を中心に11世紀初以前の中国古代写本全体を対象に、奥書等の集録を試み古代写本研究の基盤整備に資すべく『中国古代写本識語集録』（1990年）を編刊した。

中国の法律や制度が朝鮮半島から日本列島に伝わり大きな影響を与えたばかりでなく、前近代東アジアには多様な文化交流がみられた。高麗や日本の紙が唐宋以降中国でもてはやされたことや、日本古代の六国史が中国

IX 研究活動

の史籍、殊に唐朝の実録を模した点の多い点などをめぐって若干の論考を刊行した。近年は井上光貞・笹山晴生氏を中心とする『続日本紀』校注の作業に、中国の史書や文献の面で協力している。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻 吐魯番・敦煌文書研究
1990, 91年度, 成城大学 東洋文化史 1990年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

評議員 (1990年 4月 ~ 1992年 3月), 東京大学キャンパス委員会 (1990年
4月 ~ 1992年 3月), 大学院問題懇談会 (1990年 4月 ~ 1991年 3月)。

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

史学会 (理事), 東洋史研究会 (評議員), 東方学会 (理事), 東大中国学
会 (評議員, 理事)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「唐代の郡望表」『東洋学報』42-3・4 1959~60, 「中国古代籍帳研究 概
観・録文」東文研報告 1979年, 編者『敦煌の社会』1980年, 編『大唐開
元禮附大唐郊祀録』第2刷 1981年, 編『中国古代寫本識語集録』東文研
叢刊 1990年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

(編)『講座敦煌5 敦煌漢文寫本』大東出版社 1992年 3月, (編)
『中国礼法と日本律令制』東方書店 1992年 3月, 「韓琬『御史臺記』につ
いて」『布目潮瀨博士古稀記念論集 東アジアの法と社会』汲古書院
1990年 5月, 「唐代西州給田制之特徴」『敦煌吐魯番学研究論文集』漢語大
詞典出版社 1990年 6月, 「關於《日本国見在書目録》刑法家」『中国法律

史国際学術討論会論文集』陝西人民出版社 1990年9月、「敦煌における土地税役制をめぐって」『東アジア古文書の史的研究』刀水書房 1990年9月、「李周經受贈帖簡介」（李雲九訳）『碧史李佑成教授定年退職紀念論叢 民族史의展開와그文化』（上）1990年9月、「東亜年号管見——踏襲・模倣をめぐって」『東方学』82 1991年7月、「契」『講座敦煌5 敦煌漢文寫本』大東出版社 1992年3月、「敦煌漢文寫本の価値——写本の真偽問題によせて」『講座敦煌5 敦煌漢文寫本』大東出版社 1992年3月、「唐令と日本令——『唐令拾遺補』編纂によせて」『中国礼法と日本律令』東方書店 1992年3月、「中国古代の租佃契」（下）『東文研紀要』117 1992年3月。

宮脇 博史 みやじま ひろし

1. 主要略歴

1948.10生，1972 京大・文・史学卒，1974 京大大学院文学・東洋史・修士課程修了，1977 同博士課程退学，同年 京大文学部研修員（1978まで），1978 学術振興会奨励研究員，1979 東海大学文学部専任講師，1981 都立大人文学部助教授，1983 東文研助教授，1986 文献センター助教授併任（1987まで）。

2. 研究活動の概要・研究経過

朝鮮の李朝期から植民地期にかけての農村経済を中心とした経済史的研究を主たる研究テーマとしている。農村経済の変動こそが、長期にわたる対象時期の朝鮮社会の変動を、もっとも基底において支えたと考えるからである。農村経済の変動を次の2つの側面から捉えるべく、これまで研究を進めてきた。すなわち1つには、農業技術の発展を基礎とした農業経営の発展の様相を明らかにすることであり、もう1つには、国家の土地制度

IX 研究活動

や農民支配の体制をも含んだ農村をとりまく社会構造上の変化を明らかにすることである。前者に関しては、李朝期に著わされた農書の研究を進めるとともに、農業水利の発展過程の究明を行った。後者に関しては、日本による植民地化の直後に実施された土地調査事業（1910～18年）が朝鮮の土地制度・地稅制度史上に占める歴史的位罫を明らかにすべく、長年の研究をまとめて『朝鮮土地調査事業史の研究』（東文研報告）として、91年に刊行した。

上記のような研究を進める過程で、韓国の研究者との共同研究や海外資料調査を度々行ったが、とりわけ1987年に學術振興会の海外特別研究員として7カ月、1989年に東文研の海外特別事業として1カ月、韓国に滞在して、資料調査・現地調査を行ったことは、大きな力となった。

現在、前掲著書で未解明なままに終った土地調査事業を前後する土地所有関係の変化を明らかにすべく、研究に取り組んでいる。1991年4月から韓国に滞在して、李朝後期や大韓帝国期に作成された量案（一種の土地台帳）と、土地調査事業によって作成された土地台帳を、いくつかの地域に限定して比較しつつ、上記の課題を明らかにすることが今後の課題である。また近年韓国では、李朝期から近代にかけての私文書の発掘が急速に進みつつあるが、これらの資料を調査することで、量案や土地台帳のような国家の公的帳簿からは窺い知れない農村の実態を把握することも、現在の研究課題である。

以上のメインテーマの外、李朝後期以降朝鮮社会に深く浸透し、農民生活をも律するようになった朝鮮儒教についても関心を持ち、いくつかの論考を発表してきたが、これからも經濟史と思想史の境界領域に取り組みたいと思っている。

3. 教育活動（1990. 4～92. 3）

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻 近代朝鮮經濟史研究 1990年度。

4. 学内行政事務分担 (1990. 4～92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4～92. 3)

朝鮮史研究会, 東洋史研究会。

6. 過去の主要業績 (1990. 3まで)

「朝鮮甲午改革以後の商業的農業」『史林』57—6 1974年, 「李朝後期農書の研究」『人文学報』(京大人文科研) 43 1977年, 「李朝後期における朝鮮農法の発展」『朝鮮史研究論集』118 1981年, 「朝鮮史研究と所有論」『人文学報』(東京都立大) 167 1984年, 「朝鮮社会と儒教」『思想』750 1986年。

7. 過去2年間 (1990. 4～92. 3) の研究業績

『朝鮮土地調査事業史の研究』東文研報告 1991年2月, 「比較史的視点から見た朝鮮土地調査事業—エジプトとの比較」中村哲外編『近代朝鮮の経済構造』日本評論社 1990年5月, 「朝鮮における水利組合事業の新たな展開 (1937年—1945年8.15)」『東文研紀要』116 1992年3月, 『近代朝鮮水利組合の研究』(共著) 日本評論社 (1992年6月刊行予定)。

川村 康 かわむら やすし

1. 主要略歴

1961.10生, 1984 早大・法卒, 1986 早大大学院法学・基礎法学・修士課程修了, 同年 同公法学・博士後期課程入学, 1987 早大法学部助手, 1990 同退職, 同大学院博士後期課程退学, 同年 東文研助手。

2. 研究活動の概要・研究経過

IX 研究活動

中国法制史を専攻し、宋代を中心として研究を進めている。その主たる研究分野は、家族法、刑罰法、法典編纂の三領域である。

第一の家族法の領域においては、養親子関係という擬制的親子関係を通じて、宋代における親子関係に側面から分析の手を加えた「宋代における養子法——判語を主たる史料として」（『早稲田法学』64巻1号・2号，1988・89年）を発表しているが、現在は贅婿すなわち入婿の法的地位に関する研究を行っている。これらの研究は、将来における宋代家族法の全体像の解明のための一段階である。

第二の刑罰法の領域においては、宋代における刑罰の特徴のひとつである法定刑と執行刑の乖離，ならびにそれらの移行の過程を中心に研究を進めている。死刑以外の正刑についてこの乖離現象を解決していた手段である折杖法に関しては「宋代折杖法初考」（『早稲田法学』65巻4号，1990年）を発表し，さらに「政和八年折杖法考」（『裁判と法の歴史的展開』敬文堂，1992年）においてその変遷について再論した。死刑についての乖離現象の解決手段は唐建中3年に下された重杖処死法であるが，執行刑である杖殺は唐代から行われていたから，この問題に関しては唐代に遡った探求を行う必要がある。このため「建中三年重杖処死法考」（『中国礼法と日本律令制』東方書店，1992年）において，いわば総論部分として唐代から宋末に至る重杖処死法のあり方を検討し，杖殺の性格については，唐代についての各論部分として「唐五代杖殺考」（『東文研紀要』117冊，1992年）を発表した。現在はその宋代における展開に関して研究を進めている。将来は宋代における刑罰体系全体のあり方の再検討を目指している。

第三の法典編纂の領域においては，複雑な宋代の法典体系の解明を目的として，『宋刑統』以外に現存する，ほとんど唯一の法典である『慶元条法事類』の解題的研究を行って「慶元条法事類と宋代の法典」（『中国法制史—基本資料の研究』東京大学出版会，1993年刊行予定）を執筆し，現在刊行準備中である。

3. 教育活動 (1990. 4～92. 3)

なし

4. 学内行政事務分担 (1990. 4～92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4～92. 3)

史学会，東大中国学会，東方学会，東洋史研究会，比較法史学会，法制史学会（『法制史文献目録』編集委員・『法制史研究』編集委員）。

6. 過去の主要業績 (1990. 3まで)

「魏氏高昌国における土地売買についての一考察」『法研論集』41 1987年，「宋代における養子法——判語を主たる史料として」『早稲田法学』64—1，2 1988～89年。

7. 過去2年間 (1990. 4～92. 3) の研究業績

「宋代折杖法初考」『早稲田法学』65—4 1990年12月，「唐五代杖殺考」『東文研紀要』117 1992年3月，「建中三年重杖処死法考」池田温編『中国礼法と日本律令制』東方書店 1992年3月，「政和八年折杖法考」杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』敬文堂 1992年5月。

松丸 道雄 まつまる みちお

1. 主要略歴

1934. 8 生，1958 東大・文・東洋史卒，1960 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了，同年 東文研助手，1966 同退官，同年 オーストラリア国立大研究員（高等研究所極東史料），1970 同退職，同年 東文研専任講師，1971 同助教授，1977 文献センター助教授併任（1980まで），

IX 研究活動

1980 東文研教授, 1986 文献センター主任 (教授) 併任 (1987まで)。

2. 研究活動の概要・研究経過

中国史研究のひとつの結節点である秦漢時代を遡って、文字資料によって追求可能の上限である殷周時代からはじめ、春秋戦国期を通して秦漢に至るまでの歴史の過程を体系的に把握したい、というのが、私のそもそもの研究の出発点であった。

春秋期以前の信憑すべき古文献は著しく乏しい。したがって、殷代研究のためには、その後期王都と考えられる河南安陽出土の甲骨文が、また西周時代研究のためには、各地より出土する青銅器銘文 (金文) が、研究資料の中核にならざるを得ない。これら二大出土文字資料は、共に考古遺物でもあり、当然資料への考古学的アプローチを欠かすことはできない。研究は勢い文献学的であると共に考古学的であるという二面性をもつことになる。

当初の研究は、甲骨文に基づく殷代史研究に集中した。甲骨文の地名を検討する中から、殷王の日常的行動範囲を考察し、その直轄区域は極めて限定されたもので、この国家は決して“古代殷帝国”といった表現によってイメージされるような規模と構造をもったものではなかったろう、と考えた (「殷墟卜辞中の田獵地について」)。これを基礎として、殷周両期を通しての新たな史的把握を目指して「殷周国家の構造」を書いた。

この論文を書く際、西周期を体系的に把握することに著しく困難を感じた。そこでこの時から、研究の中心を甲骨文から金文に移し、基礎資料を根本的に検討しなおすこととした。折から、金文史料の偽作問題が、世界的に話題になっており、私自身も深くこれに関わることになった。こういった過程を経て、金文資料を外形的のみならず、内面的史料批判の対象としなくてはなるまい、との反省が生じ、そこから、「西周青銅器製作の背景」等の、新たな史料批判方法論の確立を目指した論文を書くことになった。

その延長上の一方向として考えられるようになったのが、古代青銅器製作技術の解明である。青銅器およびその銘文の製作技法の解明がひとつの当面の課題となっているのは、そういった経過による。

こういった研究の基礎には、地道な機会を把えての資料蒐集・集積が不可欠である。甲骨文・金文・青銅器の拓本・写真等の蒐集が並行的に進められ、図録・目録等として継続して整理・刊行しつつある。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学・中国哲学専攻 殷周青銅器銘文研究 1990, 91年度

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

図書行政商議会 (1990年 4月 ~ 91年 3月), 東京大学大学院人文科学研究科委員会 (1990年 4月 ~ 91年 3月)。

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

日本甲骨学会 (代表者), 史学会 (評議員), 東方学会 (評議員), 東大中国学会 (評議員), 書学書道史学会 (常任理事), その他参加学会は多数につき省略, 鄭州大学殷商文化研究所 (名誉研究員)。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「殷墟卜辞中の田獵地について——殷代国家構造研究のために」『東文研紀要』31 1963年, 「殷周国家の構造」『岩波講座・世界歴史』4 1970年, 「西周青銅器製作の背景——周金文研究・序章」『東文研紀要』72 1977年, 『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字』図版篇 東文研報告 1983年, 「西周後期社会にみえる変革の萌芽——百鼎銘解釋問題の初歩的解決」『西嶋定生博士還暦記念 東アジア史における国家と農民』山川出版社 1984年。

IX 研究活動

7. 過去2年間(1990.4~92.3)の研究業績

「後漢建和二年銀錠」釋文(李峰氏との共同執筆)『上海錢幣通訊』第20期 1990年8月,「小臣餘犧尊釋文」・「昏鼎釋文」・「馯殷釋文」・虢季子白盤釋文『中國法書選1 甲骨文・金文』東京・二玄社 1990年11月,「金文の書體——古文字における宮廷體の系譜」『中國法書ガイド1, 甲骨文・金文』東京・二玄社, 1990年11月,「殷周金文の製作技法について」同上(中文譯 蔡哲茂譯「試説殷周金文的製作技法」『故宮文物月刊』9—5 1991年8月),「金文をめぐる」(新井光風・牛窪梧十氏との鼎談)同上,「金文参考資料」同上,「東アジア古代青銅器文化の特異性」『高橋コレクション総目録VI・東アジア』藤澤市教育委員会 1991年3月,「殷周青銅器と銘文の製作技法を探る」『墨(すみ)』90 1991年6月,「殷周青銅器銘文の製作技法」『近代詩文書作家協會々報』36 1991年8月,「西周時代の重量單位」『東文研紀要』117 1992年3月,「再論殷墟卜辭中的田獵地問題」『張政烺教授八十壽辰論文集』北京(待刊),「關於西周時代重量單位(和)」第三屆中國文字學國際學術研討會提出論文, 1992年3月提出, 台北(待刊)。

高嶋 謙一 たかしま けんいち (1990.8退職)

1. 主要略歴

1935.5生, 1960 上智大外国語学部ドイツ語中退, 1965 ワシントン大(シアトル)・文・東洋言語・文学科卒, 同年 同大学院修士課程入学, 同年 同助手(1967まで), 1967 同大学院修士課程修了, 同年 同博士課程進学, 1968 同助手(1969まで), 1970 同博士課程修了, 哲学博士(Ph. D. ワシントン大), 1971 アリゾナ大文学部助教授, 1972 プリティッシュ・コロンビア大文学部助教授, 1981 同副教授, 1988 東文研助教授, 1989 プリティッシュ・コロンビア大文学部教授, 同年 東文研教授, 1990 同退職, 同年 カナダ帰国, プリティッシュ・コロンビア大

文学部教授として復帰。

2. 研究活動の概要・研究経過

東文研在職中の研究活動は、古代漢語の基礎的研究に専念し、特に甲骨文字の字積諸説を集録する作業に携った。

3. 教育活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

4. 学内行政事務分担 (1990. 4 ~ 92. 3)

なし

5. 学外活動 (1990. 4 ~ 92. 3)

American Oriental Society (President, Western Branch), Society for the Study of Early China, Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Project on Linguistic Analysis-Chinese Linguistics, 東方学会, 日本甲骨学会。

6. 過去の主要業績 (1990. 3 まで)

「婦好の疾病に関する一卜辞の試釈」『甲骨学』12 1980年, “Noun Phrases in the Oracle-Bone Inscription,” *Monumenta Serica* 36 1984, 『殷墟文字丙編通検』中央研究院歴史語言研究所刊 1985年, “Morphology of the Negatives in Oracle-Bone Inscriptions,” *Computational Analysis of Asian and African Languages* 30 1988, 「殷代貞卜言語の本質」『東文研紀要』110 1989年, “A Study of the Copulas in Shang Chinese” 『東文研紀要』112 1989年。

7. 過去2年間 (1990. 4 ~ 92. 3) の研究業績

IX 研究活動

本研 究 所 在 職 期 間 に は , な し

東アジア部門（第二）

蜂屋 邦夫 はちや くにお

1. 主要略歴

1938.11生，1963 東大・教養・教養卒，1965 東大大学院人文・比較文化・修士課程修了，1968 同博士課程退学，同年 東文研助手，1974 同退職，同年 東大教養学部非常勤講師，同年 東文研助教授，1987 同教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

中国思想史の研究を継続して行っている。中国儒教，道家道教，仏教の三教（三種の思想）があるという基本的認識のもとに，それぞれの側面および三者の影響関係について考察してきた。

三教が三教として問題になるのは，仏教が中国読書人階級に広く関心を持たれた東晋以降のことであると考え，まず東晋における仏教の受容の問題を検討した。その際，仏教は道家思想を基盤として受容されたので，考察の主要部分は仏教と道家の思想交渉の問題となる。これについて，孫綽，孫盛，王坦之，戴逵らを取りあげ，それぞれ専論のかたちで論文を書いた。

一方，班研究として79年以来『儀禮疏』の講読会を行ない，その成果を『儀禮士冠疏』（84年），『儀禮士昏疏』（86年）の両書にまとめた。これは儒教方面の研究である。ひきつづいて三教交渉史の資料として唐初に撰述された『弁証論』を輪番制で研究し，その成果を蓄積してきている。

この間，85年以来，中国との学術交渉を断続的に行い，85年には六朝思想史を主題とする情報交換を中国主要研究所，大学で行った。同時に，道

IX 所員の活動

観調査に着手し、北京、西安、成都、武漢、上海の道教の現状を瞥見した。それを機縁として、87年、88年の兩年度に、「中国道教の現状調査」を主題として海外学術調査を実施した。これは、主として陝西、四川兩省の道教調査である。その結果を『中国道教の現状』（本文冊・図版冊、90年）として公刊した。

90年には10カ月にわたって在外研究に従事し、上海の大学を拠点として、北京大学哲学系、四川社会科学院哲学研究所その他と学術交流を行い、また、山東、遼寧、江蘇、四川等の道観調査も行った。

90年末に帰国し、91年には12世紀に華北において成立した道教である全真教の、開祖王重陽と第二祖馬丹陽の生涯と教説について、在外研究の成果を踏まえながら東文研報告として執筆した。すなわち、ここ数年の研究の中心は道教方面にある。91年度の事業として『金代道教の研究——王重陽と馬丹陽』を完成させ、その後は道観調査を継続して行う予定であり、すでに92年度から3年間海外学術調査を実施することが決まっている。

3. 教育活動（1990. 4～92. 3）

東京大学大学院人文科学研究科中国哲学専攻 南朝の思想 1990年度、金代道教思想研究 1991年度、駒澤大学仏教学部 中国哲学史 1991年度、神戸大学文学部 中国思想特殊研究 1991年度。

4. 学内行政事務分担（1990. 4～92. 3）

人文科学研究科委員会（1991年3月～）。

5. 学外活動（1990. 4～92. 3）

日本中国学会、日本道教学会、東大中国学会（評議員）。

6. 過去の主要業績（1990. 3 まで）

「范縝『神滅論』の思想について」『東文研紀要』61 1973年、編『儀禮